

地の塩、世の光

松下 惠美

聖バルナバ助産師学院教員

助産婦になって13年がたち、早いもので母校の教員となってからも5年が過ぎました。現在、恩師の先生方と共に勤務しています。そのため、いつまでたってもひよっこですが、学生相手に悪戦苦闘しながらも、まわりの先生方や卒業生、学生に支えられて日々頑張っています。

“ららら助産婦学院”

助産婦として臨床で働いていた頃は、実は学生教育には関心がありませんでした。臨床助産婦として高い技術を身につけ、現場でバリバリ働き続けようと思っていました。その考えが180度転換したのは、厚生省看護研修研究センターで教員養成研修を受けたことがきっかけでした。1年間の学びは私にとってまさに「目からウロコが落ちる」体験だったのです。

研修中は助産婦教育について、同期の研修生と何度も話し合いました。助産婦教育演習では“ららら助産婦学院”という架空の学校を作って、どんな学生を育てるのか議論しながら、「学生教育は未来の助産婦を育てることなのだ」と、ハタと気づいたのでした。未来の助産婦とは、今の世の中で必要とされている「理想の助産婦」につながります。教育とは、壮大で素晴らしいものであると思ひ至りました。

しかし、実際の学校では“ららら”のようにはいきません。現実には厳しくシビアです。それでも卒業していく学生は、理想に向けて培われた、様々な可能性をもつ「理想を実現する力のある助産婦」です。卒業生を送り出す時、理想に向かっ

て進んでいくであろう彼女たちの喜びと自信にあふれた姿を見ると、本当に晴れ晴れとした気分になります。

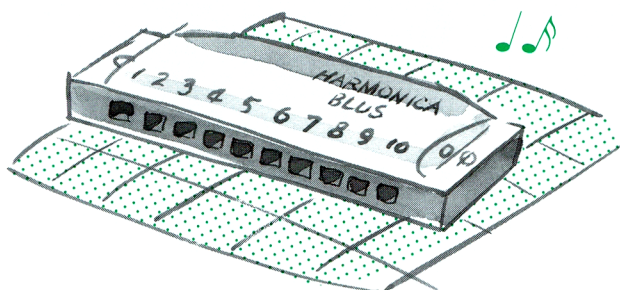
地の塩、世の光

私の母校で、現在の勤務先でもある聖バルナバ助産師学院では、入学式、卒業式で必ず読まれる聖句があります。それは『新約聖書』マタイによる福音書の「あなたがたは地の塩である～(中略)～あなたがたは世の光である」という箇所です。私の学生時代にも読まれました。代々の入学式、卒業式でずっと読まれていたと思います。

この聖句の意味は、「塩は自分の身を溶かして塩気を生み出し、光はロウソクがわが身を燃やして光を生み出します。塩や光は全ての生き物にとって、生きていく上で必要なものであり、他のものに代えることはできません。塩や光のように、私たちにも自分にだけ与えられた大切な役割があり、そのためには体を投げ出して全身全霊で立ち向かわないといけない」という意味だと、前々任のチャブレンから教えていただきました。

新しく学生を迎える時、この聖句は自分に向けられているように感じます。私が知っている全てのことを学生に伝え、できる限りの努力をして、全力で未来の助産婦を育てていくように、とのメッセージを感じ、身が引き締まります。そして卒業時には、学生一人ひとりがこの聖句のように、社会に向けてかけがえのない役割を十分発揮するよう、そんなエールに聞こえます。

聖バルナバ助産師学院は昭和17年の創立以来、



2100人以上の卒業生を送り出しています。そのうち私が教育に携わった学生は131人とわずかですが、すべての卒業生に光を灯し続けてもらいたいと思っています。

可能性を信じて

妊娠はどんなに長くても10か月で結果が出ます。分娩については1~2日間くらいです。待つのが苦手な私にとって、産科はすぐに結果が見えるので、満足が得やすい分野でした。

しかし、教育はすぐに結果は出ません。学生養成中は1年後の免許取得を見越して、一つずつ課題を積み上げていきますが、1年間でできることはほんの少しだけです。「これで本当に求められている理想の助産婦を養成できているのかな」と不安になったり、臨床から高い目標を提示されて戸惑うこともあります。

そんなとき、臨床で頑張っている卒業生の姿には、励まされます。初めて送り出した学生は、臨床経験5年の中堅となり、病棟での中心的役割を担っています。学生時代いろいろ気をもんだ学生も、年月とともに立派に成長していて、学生たちが持つ可能性を信じることの大切さを実感します。

卒業してからの彼女たちの姿を近くで見たり、彼女たちから逆に教えられたりする場面があります。そんなとき、「やっぱりこのやり方で間違っていなかったんだな」と確認でき、また、「大きく成長しているな」とうれしい気持ちになります。

1年間の養成のため、あっという間に季節が巡ります。もっと深く、もっと多くのことを学んで

ほしいと、焦った時期もありました。でも最近は、「数年後に良い実が結ばばいいなあ」と、のんびり、じっくり構える余裕がもてるようになりました。それも、確実に成長し実を結んでいる卒業生の活躍を、近くで感じていただけるからだと思います。

母校の光り

私が学んだ看護学校が閉校することになりました。閉校にいたる詳しい経緯はわかりませんが、学校経営が病院の人員確保には直接つながらないことや、経済的な面も影響しているのかも知れません。卒業生として、自分の母校がなくなることはとても寂しく感じます。また、学校存続のために何もできなかったことも、歯がゆく残念に思います。

「経営」も大切だとは思いますが、学校の役割、存在の大切さ、他の貢献度も、もっと認めてもらいたいと思います。教育施設として学生を受け入れ教育することは、看護全体の質の向上にもつながると思います。

助産婦学校も専門学校で閉校するところが増えています。助産婦教育の大学化も影響があるのかと思います。教育現場に身を置いた今、学校運営の現実には厳しいことを感じますが、それでも助産婦になりたいと願う学生がいる以上、その思いに応える役割があると思います。

卒業生のため、学生のため、社会のため、そして自分のためにも、母校の火を灯し続けていかれるよう、努力したいと思います。

(まつした・えみ)